等定法なし、

一まくらの繪に、獏といふけだものを書く事、獏はあしきゆめをくらふといふ事あれば、獏をかく也、

〔嬉遊笑覽二中服飾〕後世入子枕といふ物あり、箱枕の細長きを、五つも七つも數多く入子にしたるなり、夢想枕といふも是なり、もと琉球製にや、中山傳信錄に是を套枕といへり、

〔中山傳信錄六〕枕

大小套枕、中藏數具、客至則人授一枕、

〔用捨箱下〕夢想枕　夢想流の髮

夢想枕、又入子枕ともいふ、是は五ッ或は七ッ入子にしたる箱枕なり、今もあるべけれど、江戸にてはおこなはれず、總物に夢想と名つくるは、神佛の告なんどいふより移りて、不思議といふ程の事にて、物の形の變ずるをいふ、一ッかと思へば二ッにも三ッにもなる不思議な枕といふ義なり、裏かと思へば表にも變を夢想羽織、板にて張つめたりと見ゆるが窗になるを夢想窗、引出しのごなたへも拔、あなたへもぬくるが夢想引出し、此類多くあるべし、或書に夢さう簞笥は夢窗國師の持玉ひし調度をうつしたるなりと記したるは信じ難し、夢想枕は相摸の國なんどにて、昔は專つくりたるが、東海道名所記萬治に小田原足踏、けやきの丸木履なり、夢想枕、又宿の右の方に外良ありといふ事見えたり、本朝文鑑

坂東太郎、寛文七年刻丸撰　近年又同名の俳書あり、

夢想枕神ならば神郭公　黃吻

伊勢宮笥延寶八年刻

星祭り七ッ入子に落にけり　撰者　心友